

## I : 宗教現象としてのキリスト教

### <前回> イスラエル民族の起源

1. 民族＝「ルーツについての物語を共有する集団」＝「血・地＋アルファ（意味・フィクション）」  
↓  
「民族の成立＝神話の成立」
2. 神話：起源神話・神々の神話、象徴機能を持つ多数の観念が物語形式に結合  
神話の真理性 cf. 啓蒙的偏見
3. イスラエル民族  
諸部族の統合＝イスラエル民族意識の成立＝神の統一＝旧約の伝承（神話）の成立
4. アメリカの市民宗教 → 多元的国家アメリカの統合の基盤  
「アメリカ人になる」（＝アメリカ人としての自己意識を獲得し承認される）には、  
アメリカの建国神話とそれに表現された価値体系を内面化する必要がある。
5. Q：アメリカはキリスト教国か？

## 第8講：現代聖書学の動向から

### 2 聖書の構造分析

1. 聖書の統一性という議論の可能性：正典論／近代聖書学／構造主義

聖書学は、聖書テキストの学的研究を旨とする学問であるが、これまでそのときどきの最新の研究方法を貪欲に導入しつつ、展開してきた。前回の「イスラエル民族の起源」は、近代聖書学がその成立当初より深い関わりにあった、歴史学、文献学、そして考古学、人類学などと、現代においてもなお深い連関にあることを示している。しかし、現代聖書学の展開はそれだけではない。現代聖書学においては、他の隣接のテキスト理論や文芸批評学の場合と同様に、1960年代以降、従来の歴史学的方法論を脱却し、新たに注目されつつあった構造主義的テキスト論を聖書に適用する試みがなされた。その流れは、さらに多くのテキスト理論（受容理論、ポスト構造主義、精神分析批評、フェミニスト批評など）を包括ししつつ、現在へ受け継がれている。今回は、レヴィ＝ストロースの神話研究の方法論を聖書テキストに適用することによって、いかなる聖書理解が可能になるかについて、考察を行いたい。近代聖書学は正典論的な聖書理解を解体し、テキストをその歴史的生成過程へと分析する道を選んだが、構造主義的聖書解釈は、正典論とは別の仕方で、聖書を一冊の書物として読む可能性を示している。

#### (1) 神話の深層構造

2. 神話は象徴体系である。その研究は、通時的研究（神話そのものの歴史的生成・発展において解明する。前回の講義はその一例）と共時的研究（神話の表層構造とその共時的比較によって、歴史的諸現象の深層構造、そして精神の深層構造の解明を旨とする）の二つ

に大別できる。今回のテーマは後者であるが、レヴィ=ストロースの構造主義的神話研究に入る前に、デュメジルの比較神話学を概観しておこう。

### 3. デュメジルの比較神話学 (『神々の構造』国土社、より)

インド・ヨーロッパ語族の神話体系の三分構造

→ 神々の構造—社会構造—思惟構造 (三分イデオロギー)

デュメジルの方法論は、膨大なインド・ヨーロッパ語族の神話群 (ギリシャ神話、北欧神話、リグ・ヴェーダ、アヴェスターなどの神話・宗教文献から、碑文や歴史書などまで) を比較するというものである。それによって、三層の構造が明らかにされた。

### 4. 神々の構造

インド・ヨーロッパ語族の諸神話体系に登場する神はきわめて多様であるが、機能に注目するとき、次の三つグループに分類できる (三機能体系)。

神々の機能	リグ・ヴェーダ
主権 (統治と祭祀、法と呪術) :	ミトラ (法) とヴァルナ (魔術)
戦闘 (軍事) :	インドラ
生産 (豊饒、平和) :	アシュヴィン双神 (治療者、善き物の付与者)

Q : この神々の構造を、ギリシャ神話、北欧神話で確認せよ。

### 5. 社会構造

神々の構造は、次のようなインド・ヨーロッパ語族の古い社会構造 (プロト・インド・ヨーロッパ語族。現在では、インドのカースト制度に見られる) に対応していると考えられる——神と人間の同形性！——。

機能	社会階層・カースト
主権 :	ブラフマナ (バラモン)
戦闘 :	クシャトリア
生産 :	ヴァイシャ

なお、第四番目のカーストである、シュードラは、アーリア人の民族移動の際に吸収された被征服民であると考えれば、問題の社会構造には含む必要はない。インドのカースト制度以外の事例は、デュメジルの著書を参照のこと。

### 6. 思惟構造 (分類方法=現実把握方法=思考方法)

以上の神々の構造や社会構造の分析はそれ自体興味深いものではあるが、まだ精神の深層構造と呼べるレベルの事柄ではない (むしろ、表層構造に属している)。深層構造を論じる手がかりは、デュメジルが取り上げる思惟構造に見ることができる。人間の思惟・思考を規定している思惟構造を考える際に注目すべきは、世界内で出会う事物や出来事についての分類方法である。なぜなら、類似と差異の認知に基づく分類は、物事を考える基盤だからである。次に、デュメジルが挙げる事例をいくつか紹介することにしよう。

	災い・逸脱 (ペルセポリス碑文)	治療法 (アヴェスター)	色 (ケルト)
主権:	虚偽	呪文	白
戦闘:	敵の軍勢	ナイフ	赤
生産:	飢饉	植物	緑

インド・ヨーロッパ語族に属する人々には、事物や出来事を、主権、戦闘、生産に対応する三つのものに分類整理して把握するという思惟構造（三区分イデオロギー）が存在し、神話体系にもその深層構造が反映している、との分析である。

#### 7. デュメジル → 神話の深層構造研究

①構造主義的神話論：レヴィ＝ストロース

②深層心理学的神話論：ユング

こうしたデュメジルの比較神話学の議論は、より体系的な方法論にしたがって、その後の神話研究に受け継がれることになる。

#### 8. 日本神話の三区分構造とその起源の問題

以上のデュメジルによる比較神話学は、インド・ヨーロッパ語族に限定した研究であり、たとえば、三区分イデオロギーを日本神話に適用できるかどうかは、問われていない。しかし、日本神話の研究者の間では、この点について議論が行われ、デュメジルの解明した結論がある程度日本神話にも妥当するとの指摘がなされている。たとえば、神々の構造と社会構造は、スサノヲ神話に関して、次のようになる。

##### <日本神話の構造>

		機能	社会コード
人格神・天津神	アマテラス	主権	征服(?)
天津神	スサノヲ	戦闘	征服(?)
国津神	クシナダ	生産	被征服(?)
自然神	ヤマタノオロチ		

また、三区分イデオロギーに対応したものとしては、次のような例が考えられる。

	三種の神器	敵 (ヤマトタケル)
主権:	鏡	出雲建
戦闘:	剣	蝦夷
生産:	曲玉	熊曾建

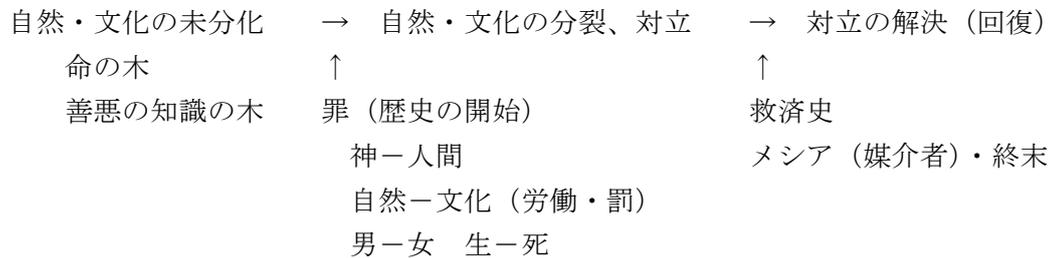
#### 9. Q: 日本神話における三機能体系、三区分イデオロギーの存在はどのように考えることができるか。単なる偶然でないとすれば、人類普遍?、あるいは伝播。

三機能体系も三区分イデオロギーも、日本神話全体というよりも、王権神話に属する物語群に特徴的に見られることに注目せよ。

#### (2) 構造主義的神話研究

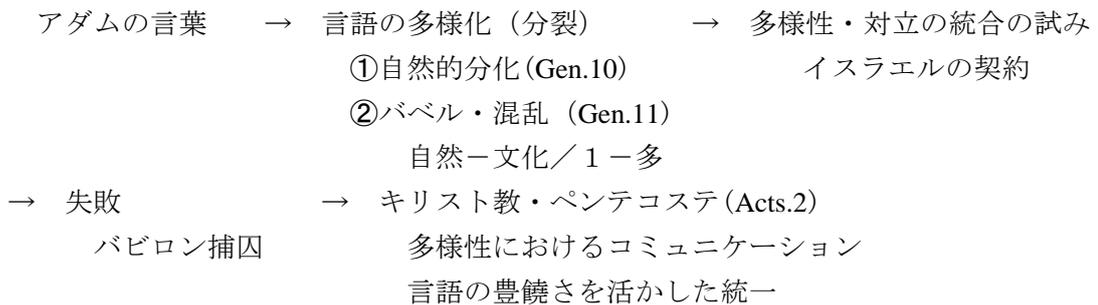


の解決の鍵を握るのはメシアの到来であるが、矛盾の発生の根本に神と人間の対立が存在することから、メシアは神と人間の媒介を可能にする存在者であることが帰結する。



### 13. 聖書の神話構造（2）：バベル神話からペンテコステへ

同様の神話構造は、聖書における言語の問題からも読み取ることができる。原初のアダムが使っていた単一の根源言語が、人類史の展開過程で多に分裂し、人類の相互のコミュニケーションは著しく疎外され、多くの紛争や対立を帰結することになる。旧約聖書が描く、その後の人類の歴史は、言語の統一回復の一連の試み——統一帝国の建設による一元化——とその失敗という視点から理解することができる。この問題に対して聖書が描く解決のヴィジョンとしては、ペンテコステの出来事を挙げるることができる。



### 14. 分裂を克服する試み：グローバリゼーションとは何か？

1. 世界帝国＝一元化      2. 主権国家の連合体・ネットワーク

キリスト教におけるペンテコステ・ヴィジョンは、「2」の選択肢に近い。これは、キリスト教思想の視点から政治論や平和論を構築する際に、留意すべきポイントである。

cf. カント『永遠平和のために』岩波文庫

#### <使徒言行録2章>

1 五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、2 突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。3 そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。4 すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。5 さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、6 この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あつけにとられてしまった。7 人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、

皆ガリラヤの人ではないか。8 どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。9 わたしたちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、10 フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、11 ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もおり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」

#### <参考文献>

1. レヴィ=ストロース 『アスディワル武勲詩』 青土社  
『神話論理 全5巻』 みすず書房（一部未刊）
2. G. デュメジル 『神々の構造——印欧語族の三区区分イデオロギー』 国土社  
『デュメジル・コレクション1～4』 筑摩書房（ちくま学芸文庫）
3. ロドニー・ニーダム 『象徴的分類』 みすず書房
4. 池田清彦 『分類という思想』 新潮選書
5. 北沢方邦 『構造主義』 講談社現代新書  
『日本神話のコスモロジー』 平凡社
6. 小田 亮 『構造人類学のフィールド』 世界思想社
7. 吉田敦彦 『日本神話の特色』『日本神話のなりたち』 青土社
8. 大林太良 『日本神話の構造』 弘文堂  
『神話の系譜』 講談社学術文庫
9. ノーマン・ペリン 『新約聖書解釈における象徴と隠喩』 教文館
10. ロラン・バルト他 『構造主義と聖書解釈』 ヨルダン社
11. ダニエル・パット 『構造主義的聖書釈義とは何か』 ヨルダン社
12. P. リクール/E. ユンゲル 『隠喩論——宗教言語の解釈学』 ヨルダン社
13. P. リクール 『リクール 聖書解釈学』 ヨルダン社
14. エドモンド・リーチ 『聖書の構造分析』 紀伊國屋書店
15. ウンベルト・エーコ 『完全言語の探求』 平凡社
16. ノースロップ・フライ 『大いなる体系——聖書と文学』 法政大学出版会